

CASE PRESENTATION

Dentist

Technician

Hygienist

診査・診断で治療が変わる —CT画像の効果的な活用—



奈良県 木原歯科医院
歯科医師
木原敏裕

はじめに

インプラント治療を始めて22年になるが当初はパノラマ、模型による診断のもと埋入方向や補綴の設計を決めていた。骨の存在するところにインプラントを埋入するにはそれで充分であったと思うが即時埋入や上顎洞などを扱うようになるにつれ、直視では見えない部分のオペが頻繁になり歯科用CTの必要性を感じていた。とくに術後の

状態が3次的にどのようなになっているかという点ではCTでしか評価ができないということもあり、昨年「プロマックス2D/3D」の導入に踏み切ったというのが本音である。

CT画像を見ていて感じることはインプラントのために3次的に確認しようとする点と他の点においてもさまざまな情報を得ることができ、今までの臨床的な診断とは違

い想像で話していたことが目で見て分かる実際的な資料として活用できるということであった。

ここでは多くの人が感じている歯科治療における基本的なペリオやエンドに関する診断の重要性についてもいかにCTが強い味方になるか、ということを整理してみたい。

インプラントにおいて

上顎洞の問題や即時埋入のインプラント治療においては、今まではパノラマやデンタルX線による診断のもとオペを行っていたが、術前の3次的な骨の解剖学的形態、骨の角度などをCTを活用することで、より確実に位置づけができるようになった。

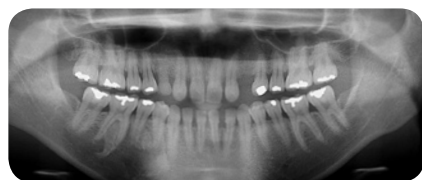
症例1 前歯部即時埋入について



1-1 33歳女性、上顎の先欠によるラミネートベニアとインプラント治療を希望した。下顎に関しては矯正治療が必然となることから患者の希望で処置は上顎のみとした。



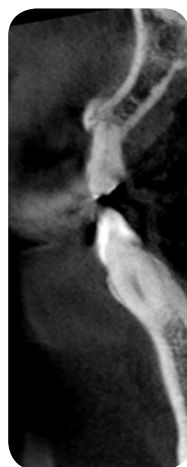
1-2 残存しているCの歯冠の軸方向は正常に見える。



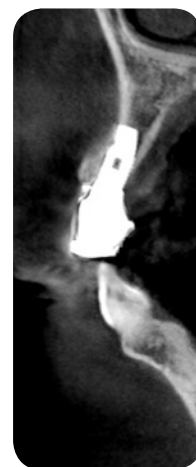
1-3 術前のパノラマ。



1-4 術後のパノラマ。



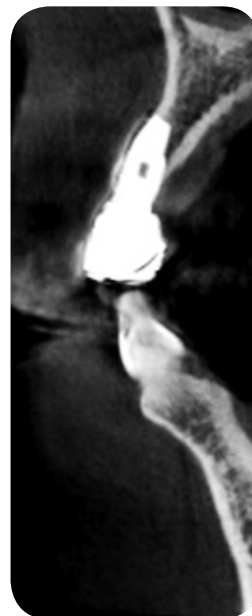
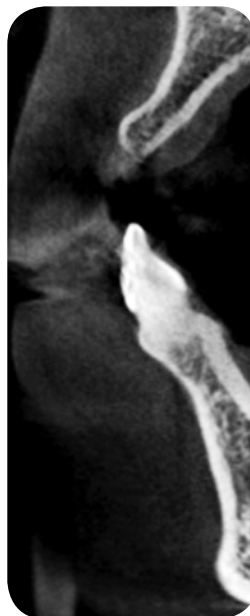
1-5 CT画像により初診時のCの歯冠方向と骨の軸方向が理解できる。



1-6 口腔内の所見やパノラマからはわからない骨とインプラントの軸方向が明瞭になる。

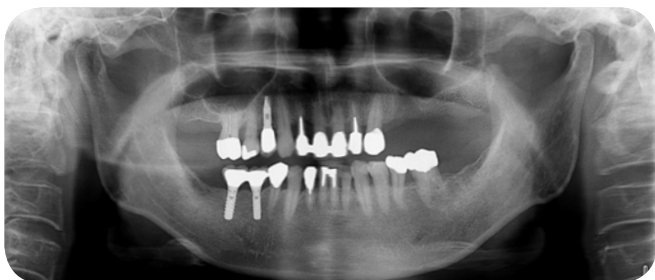


1-7 術後の正面観。



1-8 |3 部位の術前、術後。

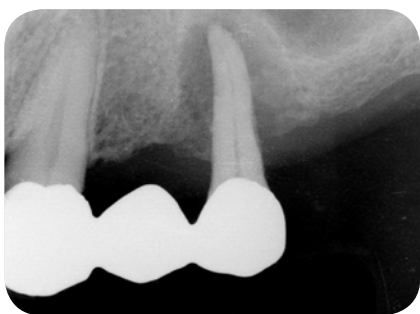
症例2



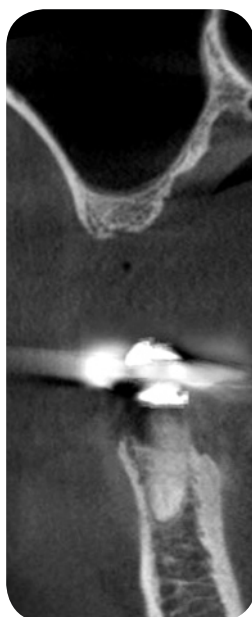
2-1 上顎左側の術前の状態。|6 部位の上顎洞までの骨は約3mm。



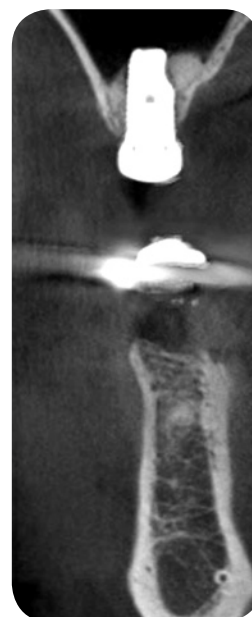
2-2 |4、|6 にインプラントを埋入した。



2-3 |5 抜歯前の状態。



2-5 術前の|6 部位の垂直的、水平的骨状態。



2-6 インプラント埋入後の状態。



2-4 |4、|6 にインプラント埋入。デンタルX線で上顎洞が挙上されているのが分かる。

エンドにおいて

患者は|6の歯根破折による痛みが主訴で来院したが、その歯を抜歯後、今度は|7の疼痛を訴えていた。パノラマやデンタルX線を見てもとくに病的な画像は確認で

きなかったが、インプラントのためにCTを撮影したところ|7の近心頬側根に小さな透過像と口蓋根に大きな透過像を認めた。

症例3



3-1 術前のパノラマ。|6を抜歯してのインプラント処置が必要である。



3-2 術前の|7のデンタルでは根尖部位に異常は見られない。



3-3 CT画像で確認すると近心根に小さな根尖病巣、口蓋根に大きな病巣が認められる。



3-4 根管治療後の状態。



3-5 術後のパノラマ。



3-6 根管処置1ヶ月後のCT画像、治癒の経過が確認できる。

ペリオにおいて

17年来ペリオのメンテナンスを行っている患者であるが、CTを撮影したところ単根や複根で骨の支持のある部位とない部位との差が歴然と見ることができる。臨床

的な判断で歯を残すところと抜歯するところの判断が、CT画像により患者が理解しやすい状況の中でコンサルテーションを行うことが可能となった。

症例4



4-1 1994年初診時の正面観。



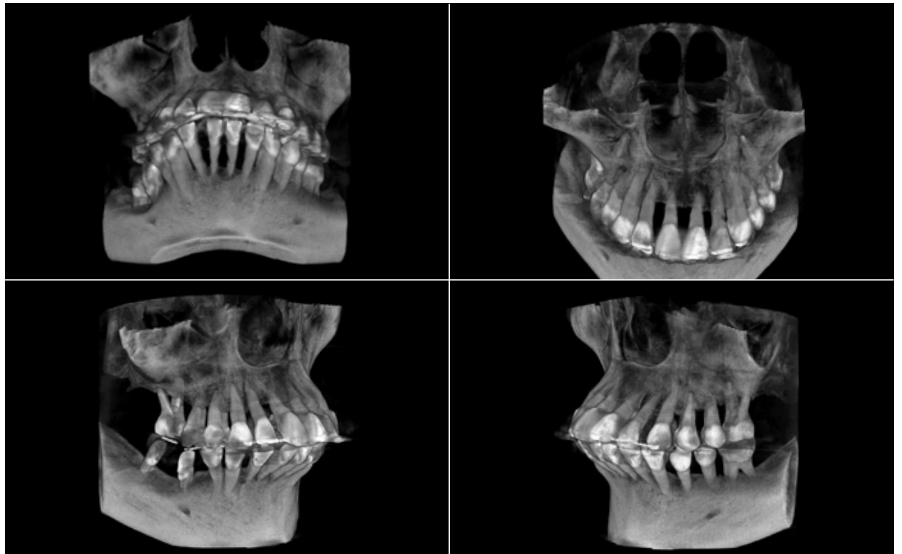
4-2 初期治療を行い固定処置を行った。



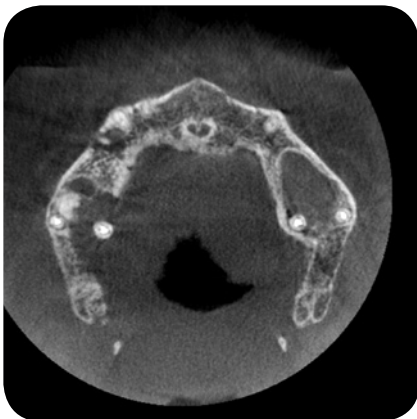
4-3 1995年時の状態。



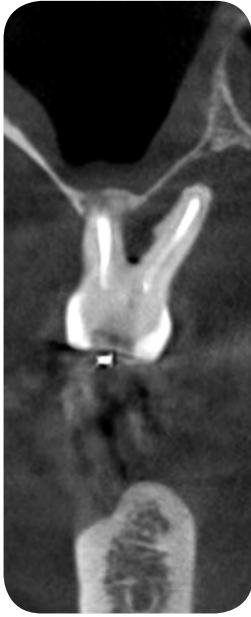
4-4 2011年の状態。17年が経過している。



4-5 2011年、CT画像で見ると骨の状態が立体的に確認できる。



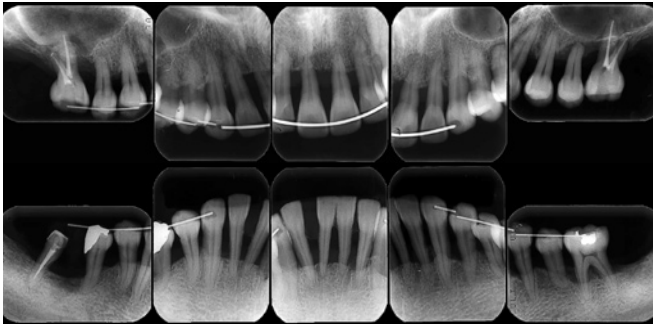
4-6 6|6 部位での頬側根と口蓋根の状態。



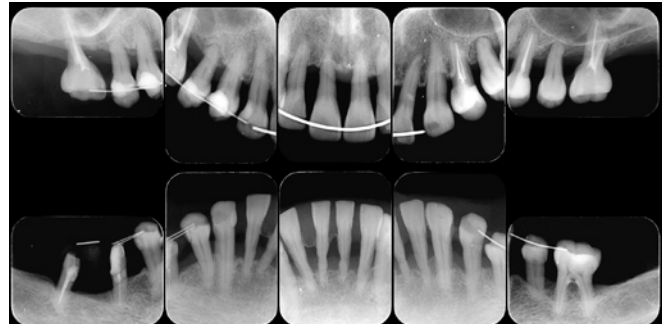
4-7 6]部位の頬側根と口蓋根の骨形態。



4-8 6]部位の頬側根と口蓋根の骨形態。



4-9 1994年時の状態。



4-10 2011年時の状態。

おわりに

従来、パノラマX線やデンタルX線による2次元の画像診断により治療の必要性や処置方針を決定していた。しかし現在、CT画像を見ることができるようになり、それまでの診断では部分的に想像で考えて

いたことが多くあったように感じる。

CT画像を見ることにより今まではこうではないだろうか、と思っていたことが実際にはこのようになっているんだ、ということがよく分かり、患者に3次的にどのよう

になっているのかを確認しながら説明を行えるようになった。

今後、さまざまな画像情報を得ることにより今までも増してより正確な診断の補助になりうると考える。